

おり目正しく

能美にな

母がしんけんな顔をしてわたしの制服をみつめている。それから持ち上げてベルトを外し、何度も首をかしげながらぎこちない手つきでプリーツを合わせ洗たくばさみで止める。位置が決まると満足そうに大きくうなずき、ていねいにアイロンをかけ始める。

母は家事が苦手だ。小さいころからお手つだいすら泣いていやがったという。祖母がなだめすかしてやっとできるようになったのは、ギョーザつみだけ。一人ぐらしを始めた時は冷ややっこばかり食べていたそうだ。ある日、とんかつがどうしても食べたくてちようせんしたもの、あわや火事。それ以来母は決してあげ物をしない。洗たくきがいつぱいになってからしか洗たくしないし、時々見かけるわたほこりにいたっては「同居している」と言いはり、名残おしそうなえんぎをしてから、気まずそうにそうじする。いつも家の中で何かをさがしており、先日テレビのリモコンは冷とうこで「発くつ」された。

そんな母が毎日仕事から帰った後、汗だくでアイロンをかけている。かわいいうプリーツスカートの制服は三十年前に母が着ていたものと同じデザインだ。新がたコロナウイルスのせいでおかれてしまった入学式。その時着ていたのはこの夏の制服だった。ところがやっと小学校生活が始まってわずか三日で、わたしはスカートの一番目立つところに穴をあけた。工作の時にはさみで切ってしまったのだ。はじめての書道の時間につけてしまったばく汁のしみなど、わたしの制服はおせじにもきれいだとは言えない。しかし母は毎ばん、大切そうにその制服にアイロンをかけている。どんなに仕事がおそくなった日にも、つかれてぐったりしながら帰ってきた日にも、アイロンがけだけはかかさない。

アイロンのかかっていない制服を着ていく日がある。母がとまりの仕事でない時だ。もちろんこまることはない。しかし、なんとも言えない不思議な物足りなさがあつた。不安なような気合が入らないような、そわそわたよりない気持ち。次の日、いつものようにきっちりとおりのついた制服を着たとき、自然にせずじがのびた。大丈夫、いつもの自分らしくいればいいという自信にあふれる気持ち。いつも当たり前に着ていたこの制服は、こんなにも自分の気持ちさをささえてくれていたんだと初めて気がついた。

家事が苦手な母が毎日汗だくでかけてくれるアイロン。これは母からわたしへの、無言のメールだ。新型コロナウイルスのせいで不きそくな学校生活の中、ぴしっとおりのついた制服を着て、今日もわたしは「おり目正しく」一日をおくれるよう気持ちを引きしめる。

学校から帰ったら、家事はきょう力するね。

お母さん、いつもありがとうございます。

「行つてきます。」